

登録有形文化財（建造物）

本郷家住宅

- | | |
|------------------|--|
| 1 対象 | 本郷家住宅主屋、文庫蔵、洋館、味噌蔵 |
| 2 所在地 | 秋田県大仙市 |
| 3 構造、形式
及び大きさ | 主 屋：木造平屋一部2階建、鉄板葺、建築面積396㎡
文庫蔵：土蔵造2階建、鉄板葺、建築面積263㎡
洋 館：木造平屋建、鉄板葺、建築面積68㎡
味噌蔵：土蔵造2階建、鉄板葺、建築面積66㎡ |
| 4 所有者 | 個人 |
| 5 登録基準 | 主 屋：二 造形の規範となっているもの
文庫蔵：三 再現することが容易でないもの
洋 館：一 国土の歴史的景観に寄与しているもの
味噌蔵：一 国土の歴史的景観に寄与しているもの |

6 説 明

本郷家の所在する大仙市の角間川地区は、穀倉地帯である横手盆地の中央部に位置する。雄物川とその支流が合流することから、近世から近代には舟運の要港として角間川港が整備され、米穀の集積地、生活物資等の集散地として繁栄した。

本郷家は、江戸時代から舟運で財をなすとともに耕地を集約し、近代においては県内でも屈指の商人地主であった。

【主屋】

明治29年の陸羽地震により旧主屋が被災したため、明治33年に全面改築された。設計は、縁者であった秋田県職員の小峰興義が担当したと記録されている。

各部屋の柱や差鴨居には、ケヤキの良材を使用されており、高くとられた天井が特徴的である。東側には3室の座敷が南北に並び、このうち北側の一室には、床の間、書院、床脇が設けられている。落とし掛けには黒柿材、床脇にはケヤキ材が用いられ、天袋や地袋の扉には金地に松を描き、黒柿の縁が付けられるなどの意匠が施されている。また、中央には炉が切られ、天井は豊大の鏡板を張り、二重廻し縁と黒柿の格縁でまとめられている。

玄関より続く通り土間は鍵状に配置され、西側に文庫蔵、南側に洋館と接続して連続した居住空間を形成している。

【文庫蔵】

慶応3年に着工し、明治2年に竣工した土蔵で、県内では数少ない近世の建築様式を残している。主屋と連結する東側のほかは、主屋と棟続きの覆屋で囲まれた内蔵の形式である。南と西側には蔵と覆屋の間には通路としての空間がとられている。

東西の壁面には出入口、南面に窓が設けられている。東側出入口は、家紋と波に千鳥の透かしが施され、蔵前を取り込んだ内側の壁三面には覆い板が付けられている。西側出入口にも千成瓢箪の透かしがみられる。内部の柱等の構造材には漆塗りが施されている。

【洋館】

昭和3年に増築された和洋折衷の建築で、通り土間の南側に続く渡り廊下で主屋と連結している。切妻屋根の軒を水平に出し、東西の壁面に特徴的な出窓を設けている。

中央に廊下を通し、東側に洋室2室、西側に和室2室がある。洋室の天井は蛇腹で、メダリオンを設けた漆喰塗りである。和室はともに8畳で、境に2畳の合いの間がある。どちらの和室にも釣床を設け、東は紫檀、落し掛けは黒檀や鉄刀木の良材が使われている。

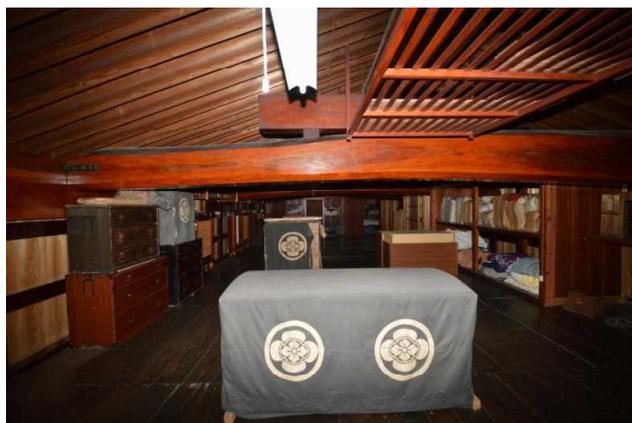
【味噌蔵】

大正10年の建築で、東面に出入口、西面に窓が設けられている。土台と床板は栗材、柱はヒバ材、梁は杉材が使われ、屋根は置屋根である。出入口の北側に階段があるが、痕跡から当初は南側にあったと考えられる。2階の中央に柱が2本立てられ、中央に通路がとられている。外壁の洗出し仕上げや、出入口の扉に鋼製戸が特徴的である。

現在は主屋北側に独立しているが、戦前はかつての調理場と隣接して棟続きであった。調理場の建物は失われているが、床敷石や基礎敷石等が残っており、当時の状況を推測することができる。



主屋



文庫蔵



洋館



味噌蔵